

親性向上につながる家族対話とリフレクションを支援する ファミリー・ポートフォリオの開発と評価

Development and Evaluation of Family Portfolio that aims to promote parental awareness and interpersonal interaction themes through reflective dialogues

佐藤 朝美
Tomomi SATO
愛知淑徳大学
Aichi Syukutoku
University

荒木 淳子
Junko ARAKI
産業能率大学
SANNO University

今野 知
Satoru KONNO
株式会社 Switch・
エンタテインメント
Switch
entertainment Inc.

佐藤 慎一
Shinichi SATO
日本福祉大学
Nihon Fukushi
University

〈あらまし〉 本研究では、親性の向上を支援するファミリー・ポートフォリオを構築し、実践と評価を行った。親性の向上の支援原理として、教育現場で用いられるポートフォリオにより生じるフォリオシンキング (folio thinking) を用い、機能を設計した。日常的に記録を取りためる際にはカテゴリや気持ちを付与し、定期的に振り返る機能として、「家族新聞」を発行する。一定期間の利用の前後に「親性尺度」の調査を実施し、その変化を検討するとともに機能を評価した。

〈キーワード〉 e ポートフォリオ, 親性, 家族対話, 生涯発達

1. はじめに

家庭の教育力の低下が課題に挙げられ、子育てに関する親の学びの促進等、様々な取り組みが行われている。親が成長する支援を行う目的のもと、筆者らは、子どもの制作物を記録・観賞することに特化した“ツクルミュージアム”の効果を検討した (Sato et al. 2014)、アプリの使用が家族対話を促し、「親性」の一部の向上に寄与している可能性を見出すと同時に、親によって活用時の意識や取り組み方の違いがあるという結果も得られている (佐藤 2016)。

2. 本研究の目的

本研究では、子どもの制作物を記録・観賞することに加え、家族全体の記録を蓄積するファミリー・ポートフォリオ (以下 FP) を構築し、評価することを目的とする。支援する親の発達や成長は、「親性」という概念を用いる。「親性」とは、「母性と父性とを統合した性質で、親が自分の子どもを養い育てようとする性質」と定義され、大橋ほか (2010) は、育児期の親性尺度を作成し、自己への認識と子どもへの認識として整理している (表 1)。

本研究では、親性の要素を促す FP を構築し、実践と評価を行う。

3. 設計要件

教師支援等の研究で有効性が明らかになって

表 1 親性尺度の要素 (大橋ほか (2010) より筆者作成)

自己への認識	<p>「親役割の状態」 子どもに接しながら、授乳や排泄の世話といった育児能力を身につけ、育児に関心を持ち親としての役割に満足感を抱いている状態</p> <p><u>【子育てへの感情 (欲求や充実感) 子どもとの時間 (対話や関わり)】</u></p> <p>「親役割以外の状態」 夫や妻といった役割をもち社会で働く存在認識を示し、自己肯定感や社会との関係性を含む</p>
子どもへの認識	<p>子どもとの関係を育みながら、子どもの現在と今後の成長・発達の様子の理解を深め、愛情をいっただきながら接している様子</p> <p><u>【子どもの内面 (欲求や気持ち, 性格や個性) 子どもの発達 (発育の段階や予測)】</u></p>

いるポートフォリオにより生じるフォリオシンキング (folio thinking) を支援原理に用い (小川ら 2012)、FP の設計要件の検討を行った。フォリオシンキングの 3 つの原理を FP に照らし合わせることで以下の要件から機能を設定した。

① リフレクション(reflection)→のこす機能

日々の出来事をリフレクションする機能を設ける。「誰」の出来事か、どんな「種類」の内容か、その時の「気持ち」はどうであったかと結びつけながらリフレクションを行うことで「親性」向上につながるものとする。

② 統合(Integration)→みる機能

振り返りためた記録を見ることで、親性に関わる認識が統合されることを想定し、時間軸のあるデータを「誰」ごと、「種類」ごと、「気持ち」ごとに見る機能を設ける。

③ 他者と共有(Sharing of learning)→家族新聞

他者との共有を通して、より深い理解の助けになるという。親子や夫婦、家族全体でFPを共有することで「親性」項目への意識が向上されることを想定し、新聞発行機能を設ける。

4. 評価と考察

【調査協力者】

子育て期である乳幼児～小学生のいる家族 20組(女性20名, 男性20名, 計40名)にアプリを1ヶ月間使用してもらった。

【分析データ】

アプリ使用の前後に質問紙調査を実施した。「親性」(大橋・浅野 2010)と「記録頻度や記録に対する意識」について事前事後の変化を見るほか、事後ではアプリの活動に関する5段階評価やアプリへの要望の自由記述の欄を設けた。

【質問紙の結果】

事前事後ともに回答のあった29名(女性15名, 男性14名)を対象に対応のあるt検定により、事前事後の比較を行った。「親性尺度」については、「子どもへの認識」の有意傾向($t(28)=1.964, p<.10$)であった。これは、佐藤ほか(2016)と同様であり、記録をとることは子どもへの認識を深めると言える。

記録に対する意識については、事後に「記録が取れていることへの実感があがり($t(28)=2.544, p<.05$)、子どもや家族の記録については、「子どもや家族の記録は、親子の対話のきっかけとなる」($t(28)=3.550, p<.01$)、「子どもや家族の記録は、家族の対話のきっかけとなる」($t(28)=-1.992, p<.10$)が事後に上がっていた。このことから、FPは親子や家族間の対話を促していたといえる。

【アプリの評価結果】

各項目に対する5件法(1.まったく違う 2.違う 3.どちらともいえない 4.そのとおり 5.まったくそのとおり)の回答を肯定的な回答(4,5)と否定的な回答(1,2,3)に分けて二項検定を行った(表2)。その結果、のこす・みる・家族新聞のどの機能も「子どもの成長を振り返ることができた」について有意差が見られた($p<.01$)。

自由記述からは、「記録に残すことを意識したため、日常のいろんなことを気にかけるようになった。」や「普段は気付かないような子どもの成長に気付くことが出来た。」の他、「妻と子供が日常なにをしているのか、なんとなくわかりました。」、「自分が一緒に感じたり、体験出来なかったことを、共有できたと思う」など、パートナーに対する気づきが促される様子が見られた。

【課題と考察】

記録することで「自分自身のあり方に関する考えがまとまる」が有意傾向であったものの、「子どもへの認識」以外に関しては、事前と事後で意

識の変化がみられなかった。多忙な夫婦が継続的に利用することの困難さも見受けられたことから、機能の改善も含め、自己への認識を深める方法について、今後の課題としたい。

表2 アプリ機能の評価結果(二項検定)

機能	質問項目	平均
のこす	【<子どもの成長>を振り返ることができた。】	3.97**
	【<子どもの成長>について新たに気づくことがあった。】	3.75
	【<子どもの成長>について深く考えることができた。】	3.72
	【<育児>を振り返ることができた。】	3.81
	【<育児>について新たに気づくことがあった。】	3.34
	【<育児>について深く考えることができた。】	3.47
	【<自分自身>を振り返ることができた。】	3.38
	【<自分自身>について新たに気づくことがあった。】	2.94
	【<自分自身>について深く考えることができた。】	2.91
	【<パートナー(夫/妻)>を振り返ることができた。】	3.25
みる	【<子どもの成長>を振り返ることができた。】	3.94**
	【<子どもの成長>について新たに気づくことがあった。】	3.75
	【<子どもの成長>について深く考えることができた。】	3.63
	【<育児>を振り返ることができた。】	3.88*
	【<育児>について新たに気づくことがあった。】	3.47
	【<育児>について深く考えることができた。】	3.44
	【<自分自身>を振り返ることができた。】	3.31
	【<自分自身>について新たに気づくことがあった。】	3.03
	【<自分自身>について深く考えることができた。】	2.88
	【<パートナー(夫/妻)>を振り返ることができた。】	3.28
家族新聞で対話	【<子どもの成長>を振り返ることができた。】	4.03**
	【<子どもの成長>について新たに気づくことがあった。】	3.81*
	【<子どもの成長>について深く考えることができた。】	3.59
	【<育児>を振り返ることができた。】	3.78
	【<育児>について新たに気づくことがあった。】	3.53
	【<育児>について深く考えることができた。】	3.5
	【<自分自身>を振り返ることができた。】	3.41
	【<自分自身>について新たに気づくことがあった。】	3.25
	【<自分自身>について深く考えることができた。】	3.16
	【<パートナー(夫/妻)>を振り返ることができた。】	3.41
【<パートナー(夫/妻)>について新たに気づくことがあった。】	3.19	
【<パートナー(夫/妻)>について深く考えることができた。】	3.13	

(* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.000$)

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP25350923 の助成を受けたものです。

参考文献

小川賀代, 小村道昭(2012) 大学力を高める e ポートフォリオ. 東京電機大学出版局
 大橋幸美, 浅野みどり(2010) 育児期の親性尺度の開発: 信頼性と妥当性の検討. 日本看護研究学会雑誌 33(5), pp.45-53.
 SATO, T., KONO, S., SAKAKI, J., SATO, S. (2014) Development of the Smartphone Application "Children's Own Museum" as an Element of a Family Portfolio. Proceedings of ED-MEDIA 2014. pp.1007-1011.
 佐藤朝美, 荒木淳子, 今野知, 佐藤慎一(2016) 「制作物の記録と観賞」が親性へもたらす影響の分析～スマートフォンアプリ「ツクルミュージアム」を事例に～. チャイルド・サイエンス VOL.12, p.39-43